

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	鎌田 安里紗
主 論 文 題 目：				
生物多様性・自然資本の保全のための協働実践の研究 —パターン・ランゲージによる記述と分析—				
(内容の要旨)				
本論文では、地域での生物多様性・自然資本の保全のための協働実践について、パターン・ランゲージの形式で記述し、協働の創出と継続のためにはどのような実践が重要となるのかを示した。パターン・ランゲージとは、よい結果を生み出している活動の実践者が持つ経験則を小さな単位（パターン）で捉え、それらを体系的にまとめたものである。それぞれのパターンでは、ある「状況」で生じやすい「問題」、それを回避してよい状態を実現するための「解決」の方法、そして、それによってもたらされる「結果」が記述される。本研究では、多様なステークホルダーの協働によって地域の自然を守り活かそうとする活動について、2つの角度から調査を行い、活動を進めてきた者が各段階で何を考え、どのように対応してきたのかという実践知を把握し記述した。 第一に、徳島県、沖縄県金武町、広島県北広島町を先進事例地として、事業者、行政、市民団体、教育機関、専門家等へのインタビューを通して、活動の立ち上げから現在に至るまでにどのような働きかけや工夫が重ねられてきたのかを取りまとめた。徳島県では 24 パターン、金武町では 23 パターン、北広島町では 22 パターンが見出され、それらは、合意形成を促進する技術、主体間のコンフリクトを未然に防ぎ信頼関係を構築する技術、順応的ガバナンスを動かすための技術として意味を持つことが示された。 第二に、特定のアクターの立ち位置ではどのような実践が重要となるのか、複数地域での活動を越境して捉えた。本研究では専門家というアクターに着目し、上記 3 地域とそのほかの地域で協働に携わった経験を持つ専門家へのインタビューを実施し、36 パターンを取りまとめた。これらパターンによって、地域を主体として活動をデザインし、信頼関係の構築と合意形成を促し、持続的で自律的な仕組みをつくるために、専門家としてどのような実践が可能なのかを体系的に捉えて提示した。 各地・各人に蓄積されていた経験則をパターンとして記述することで、地域の個性や属人性から離れて、実践において重要となる知見を捉え直し、協働のフェーズごとにどのような働きかけが鍵となるのかをマッピングして示すことが可能となった。そして、本研究を通じて提示したパターン・ランゲージは、生物多様性・自然資本の保全に向けた協働における実践を支援するための新しいツールとして位置付けることができる。 キーワード：生物多様性、自然資本、協働、実践知、パターン・ランゲージ				